望星 インタビュー Interview

この人の“実感”を聞きたい

# 堀崎 茂さん

（NPO法人東京里山開拓団 代表）

## 荒れた里山を価値ある場に

里山からの人の撤退は、野生動物の進出など多くの問題を生じさせている。そうした里山の環境保全を、児童養護施設の子どもたちと手がけ、子どもにも大人にも社会にも価値のある場づくりをしているのが、「東京里山開拓団」。代表の堀崎さんに話を聞いた。

### 里山開拓で、子どもたちのふるさとづくり

――東京里山開拓団では、どのような活動をされているのですか？

メインは児童養護施設の子どもたちとの里山開拓です。八王子市美山町の私が所有している山林に、ほぼ月一回のペースで子どもたちと通い、里山を維持する環境保全活動と、児童養護施設の子どもたちの「ふるさと」として活用していく児童福祉活動を同時に進めています。

開拓作業は、子どもたちとごく自然に進めていまして、山道や広場を歩きながら地面を踏みしめたり、落ちている木や石を拾ったり、広場の下草を刈ったりすること自体が里山環境の保全につながります。さらに子どもたちと一緒に伐った木を使ってブランコやツリーハウスを作ったり、石と粘土でかまどを作って拾い集めた枯木で焚き火料理をしたりと、開拓作業で見つけたものを子どもたちと工夫して活用するようにしています。

――活動を始めようと思われたのはなぜですか？

もともとは私自身の趣味のためでした。要は自分の

場所がほしかったんです。秘密基地的なものが（笑）。アウトドアが好きなのですが、キャンプ場や登山にはルールがありますから、勝手に木を伐ったり、土を掘ったりはできません。自分で思うように手を入れられる場所がほしいと思っていたところ、八王子に住む親戚が何十年も入ったことのない山林を持っていると知り、お願いして使わせてもらいました。

二〇〇六年から一人で開拓を始め、手作業で木や草を刈って道をつくり、二年がかりで頂上までのルートを開拓しました。最初は入る道すらもなく、頂上がどこかもわからないほどの荒れ方で、「これを自分の手で伐り拓いていくのか」と思うと、本当にワクワクしました。

**――ゲンナリじゃなくワクワクだったんですね**（笑）。

道づくりをかなり進めたところで頂上まで行くのが難しいルートだと分かり、また入り口から道を作り直したりと、作業は三歩進んで二歩下がるような状況でした。でも、少しずつできてきた秘密基地に家族や友人を連れて行くと、みんなが「また行きたい。あんな場所はない」と言ってくれる。何もない不便ところなのに、自分で木を伐ってハンモックを吊って焚き火料理をする――そんなことでもみんなが喜んでくれる。ということは、里山には人の心をパッと開いてくれる力があるのだろうと思い、その力を誰かのために使いたいと考えるようになりました。

そこで思い浮かんだのが、学生時代にボランティアをしたことがある児童養護施設の子どもたちの顔でした。虐待、貧困などさまざまな理由から自分の家で親と一緒に暮らせない子どもたちにとって、私がワクワ

**●ほりさき・しげる**　1971年愛知県生まれ。児童養護施設の子どもたちとの里山開拓には、９年間で400名の、家族と離れて暮らす子どもたちが参加。グッドライフアワード環境大臣賞最優秀賞受賞。週三勤務のサラリーマン、個人投資家、DIY好きの二児の父でもある。
東京里山開拓団ＨＰ　http://satoyamapioneers.web.fc2.com/

ク感を覚える秘密基地は、きっと価値ある場所になるのではないか。そんな思いで二〇一二年から施設の子どもたちとの活動を始めたのですが、案の定、来た子たちはみんなハマってくれます。

## いつでも戻って来られる場所

――自分たちの手で、自分たちの場所を思うようにつくっていくのは、子どもたちもワクワクしますよね。

いきなり「草刈りしよう」では、子どもたちも乗ってくれません。里山での運動会、アスレチック作りといった企画を用意しつつ、そのための場所の確保や材料集めから始めます。そうした準備作業の段階から子どもたちは夢中になりますね。石かまどをつくるには石や粘土を掘り出す大変な作業がありますが、大きな石や粘土層を探して掘り起こすのに熱中する子が続出しました。

最初は、子どもたちのために自然遊びを企画してあげよう、ふるさとになるような場所をつくってあげようなんて考えていたのですが、実際には子どもたちは石や根っこを掘り起こすといった開拓作業自体に夢中になってくれる。ですから最近は施設の子たちの支援などとはあまり思っていなくて、むしろ「おじさんの個人的な趣味に協力してくれてありがとう」という気持ちです（笑）。それに自然の中での発想力は子どものほうが上ですね。大きな倒木を見て「シーソーがつくりたい」と言い出したり、木にロープをかけて登るアスレチック遊具を「あっちの木にも渡して森の橋にしたい」と言い出したり、大人では思いつかない発想が次々に出てきます。

大人の役割は、子どもたちの発想を形にしていく材料・道具の準備やサポートです。活動を長く続けていく秘訣は、子どもも大人も関係なく一緒につくり上げていくこと、そして作業を楽しんで進めることと思っています。まあ、いちばん楽しんでいるのは私なのですが（笑）。

――そういう居場所は、社会に出てからの心の拠りどころにもなっていくのじゃないですか。

子どもたちとの活動は九年になりますけれど、「広場に残っている窪みは、○○ちゃんが落とし穴を作ろうと掘った跡だったね」「木のペイントは、冬の景色が寂しいからと○○ちゃんが描き始めたんだっけ」な

ど、里山にいろいろな思い出が積み重なってきました。そんな思い出が里山をふるさとにしていくのだと思います。「ふるさと」というからには、これからもいつでも子どもたちが戻って来られる場所であり続けたいと思っています。うれしいことに、二〇一二年のスタート時に小学校六年生だった子たちが今は二十歳ぐらいになっていて、施設のOB、あるいは会員のような立場から開拓団の活動に関わってくれるようになりました。

施設の職員の方たちにとっても、里山での活動を通じて、施設を出た後の子どもたちと会えることは安心につながります。施設を出ると管轄外となってしまい、その後のフォローがしにくいんです。連絡先さえわからないケースが今もたくさんある中で、たとえ年に一回であっても、退所後の子どもとつながり、その後の様子がわかることをすごく喜んでくれます。

## 見えてくる社会の問題点

――荒れた山林を一から開拓して、さまざまな事情を抱えた子どもたちが戻って来られる場所にしていく。環境保全と児童福祉の二つの社会問題を結びつけた活動というのはあまりないのでは？

環境の専門家や福祉の専門家に聞いても、こうした活動をしている話は他に聞いたことがない、新しい取り組みだと言ってもらえます。私たちは環境省と厚労省のそれぞれから表彰もいただきましたので、新しい取り組みであることに訴求して、荒れた山林活用のひとつのモデルを示していきたいと考えています。

児童養護施設の子どもたちと遊ぶ取り組みは、おそらくたくさんあると思うんです。荒れた山林に手を入れて環境保全をするといった取り組みも全国にはたくさんあります。でもそれがセットになれば、環境保全と社会福祉の一石二鳥で、さらに価値ある取り組みになるし、おそらく日本全国どこでもできる。東京で素人が手作りで行う私たちの活動は、そんなモデルになるのではと心ひそかに自負しています。

一方、戦後日本の社会福祉制度が確立する前は、普通にこうしたことが行われていたのではないかとも思っています。莫大な税金で公的な社会福祉制度がつくられて、それが拡充していったことには大きなプラス面があったと思いますが、反面、山林管理は林野庁、

自然保護は環境省、児童養護施設は厚生労働省といったように縦割りが生まれました。

では制度ができる前はどうだったのか。その時代も虐待や貧困がなかったわけではなく、そうした問題は地域の中の支え合いや工夫など、いろいろなかたちで解決していたのです。民俗学の本を読むと、農村部では「山上がり」と言って、経済的に成り立たなくなった家族はいったん山に入って、山の恵みで暮らし、生活を立て直すといったこともあったそうです。社会福祉の根幹を自然が担っていた時代が少し前まであったわけですね。

**――自然の力を活用しながら、地域の問題を解決する。そうしたことが失われてきてしまっている。活動を通して堀崎さんが感じている今の時代の問題点というと、そこでしょうか？**

そうですね。でき上がった制度が縦割りになっていることで、行政も専門家も事業者も「ここは自分たちの領域だから手は出さないでくれ」となっている。この発想が社会的課題の解決を遅らせていると感じています。税収も頭打ちになり、行政も対策が打てず、手に負えないことがたくさん出てきているのに、発想も仕組みも縦割りのままなので、問題は膨らんでいくばかりです。

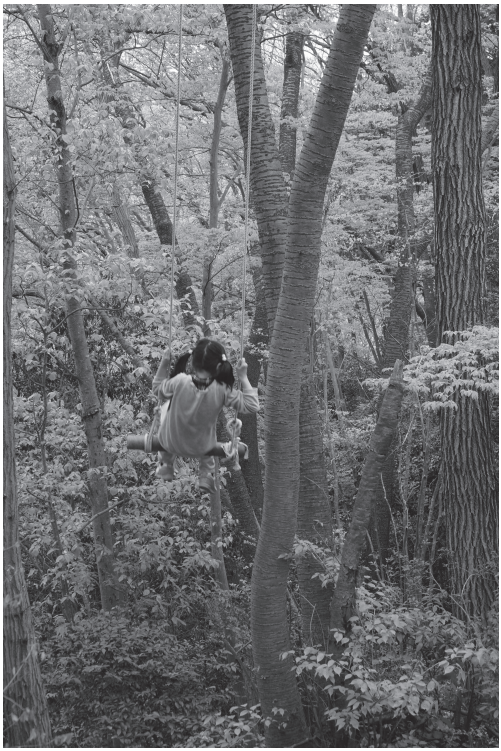
市民のほうも、価値観はお金にシフトし過ぎてしまって、多くの人にとってお金を稼ぐことが人生の第一の目標になってしまいました。こんなに税金を納めているのだから、誰かが社会のさまざまな問題は解決するだろう、自分ももっと恩恵を受ける権利はあるくらいに思う人が増えています。でも日本はもう成長段階にはありません。今の枠組みをいったん外して、「どうやったらお金をあまりかけずに持続する形で社会の課題を解決できるのか」と、行政も市民も発想自体を変えていかなくてはいけない段階にきているというのが私の考えです。

自分たちの抱えている問題について「政治や行政が何とかすべきだ」ではなくて、やれるところから自ら手をつけていく発想に切り替えていく必要があると思うんですね。

「自助」「共助」の響きは、総理大臣の発言で、よくないイメージとなってしまいましたが、本来自助・共助の概念自体はとても大事だと思うのです。荒れた里山の問題も、子どもたちの心の問題も、自分たちに何

がやれるかをまず考え、どうしてもできないところを行政や専門家が効率と効果を追求して対応するようにしていかないと、多くの問題は持続的に解決することができないのではないでしょうか。

自助の「自」は、自然の「自」でもあると思っています。日本全国にかつて里山としてフルに活用されていた山林がたくさんあるわけですから、里山の力を社会課題解決のために活用していく考え方がもっと広がってほしいと思います。



森の中の手づくりブランコ。このブランコの楽しさは、おそらく世界屈指

## 里山活用のひとつのモデルに

――里山には心を開く力があるとおっしゃっていましたが、里山を使うことで、今言われている「子どもたちの生きる力」もつきそうなのに、と思います。

そもそも大人のほうがもう生きる力を失っていますから、大人の生きる力を回復するのにも最適だと思いますよ（笑）。児童養護施設だけでなく、いろんな子どもたちにとっても、働き盛りの大人たちにとっても、退職した高齢者にとっても、里山は心の解放と成長に間違いなくつながっていくと思いますし、里山の活用の仕方はいろいろ考えられると思うんです。私たちはゆくゆくはそんなさまざまな取り組みが全国の荒れた山林に広がっていくことに貢献したいという思いもあります。

そのためには、私たちの活動が他の参考モデルになれたらとも感じています。どのくらい関わったら荒れた山林が使えるようになるのか、どういう使い方ができるよう

になるのか、子どもたちはそこでどういうふうに変わるのかを伝えていくことによって、「そういえばあそこに荒れた山林があった。それをどう子どもたちと活用していこうか」と考える人たちが増え、荒れた山林のさまざまな負の問題が解消されて、反対にプラスの価値を生み出す場所になっていくと思うんです。

ただ、里山を一から開拓していくのは、やっぱりハードルが高いということです。私も二年かかりましたし。家の周りの雑草の管理だって大変なのに、山林は手を入れても数ヵ月行かないと鬱蒼としてきてしまいます。定期的に通い続けて広場を作ったり、道を作ったりして維持していく必要があります。実際にやると、おもしろさにハマる人は多いとは思っているのですが、一緒にやってくれる仲間づくりはとても大切です。

――確かに、そこをクリアできるかは結構なハードルになりそうですね。

他にも、里山開拓の活動を続ける中で見えてきた課題があります。たとえば私の場合はたまたま使わせてもらえる山林を親戚が持っていましたが、実際にはそもそも地主さんに会えない山林ばかりです。登記簿の記載が古くて連絡先が不明だったり、遠方に住んでいたり、相続が放棄されて地主が不明だったりします。地主に会えなければ、やってみたいと思っても最初の一歩でつまずいてしまうことになります。

活動を始めたら、長く継続させることも考えていかなくてはいけません。里山保全団体は全国で相当な数がありますけれど、多くは中心メンバーがいなくなると途絶えてしまう。それは自然にとっても不幸な話で、人の手が入らずにまた荒れ放題になるだけではなく、かつて里山保全団体が助成金などで購入したものが残されてゴミの山になってしまうケースも問題になっています。里山活動が途中で途絶えてしまうと、かえって自然環境を悪化させることにもつながることがあるんです。

――東京里山開拓団の活動は、ひとつのモデルとして形になってきていると思いますが、この先の計画も考えているのですか？

今言ったハードルをどう克服していくか、そのための策を考えて手を打ち始めたところです。まず「里山が見つからない」という問題に関しては、自分の通える里山がどこにあるのかが分かるサイト（『日本ノ里山ヲ鳥瞰スル』）の運営を始めました。メディアで取

り上げられた里山関連のニュースをソースにして、里山の場所を地図上にプロットしていくというもので、全国で現在一千件ぐらい情報が集まっています。

目指しているのは里山での活動に関心がある人たちと、里山や荒れた山林を持つ人たちが集まり、つながる場です。「自分も里山に通いたい」「荒れた山林を誰か何とかしてほしい」と思ったときにつながるきっかけを提供できるようなサイトにしていきたいのです。

それからどう組織運営を継続させていくか。継続できなくなる理由の最たるものは人とお金です。お金については多くの場合、メンバーが資金を持ち寄る、寄付を募る、助成金を受けるなどの方法で活動資金をつないでいて、そこが立ち行かなくなると活動が衰退していくんです。そこで寄付や助成金に頼らなくても続けられる仕組みを何とか作っていきたいんです。

今、取り組み始めたのが、企業に里山を研修や会議の場として提供する収益事業です。企業にとっては、三密から程遠い大自然の中で、参加者がリラックスした状態での研修や会議が実施できる。その経費は里山活動を支えるのですから社会貢献にもなる。お互いのメリットを追求して、公的な助成や寄付に依存しなくても続けられる仕組みを作り始めたところです。

二つの取り組みが軌道に乗れば、荒れた山林の活用を阻む大きな障害を乗り越えることに貢献できると考えています。そして同じ志をもつ方々と連携して、全国に同じような活動を拡げていけたらと考えています。

■構成・八木沢由香


## 話題の本

### 中学生・高校生のこころと特別活動

前田善仁・関口洋美 編著
A5判　248頁　定価（本体1800円＋税）

中学校・高等学校の教員経験者が自身の実践例をもとに特別活動を解説する。また教育心理学の視点で生徒の発達状態やこころの動きを紹介。教員志望の学生にとっては授業の教科書として、教育現場で働く教員にとっては今後の展開へと活用できる。

### 情報資源組織論

竹之内禎・山口洋・西田洋平 編著
A5判　172頁　定価（本体2800円＋税）

本書は、司書課程の文部科学省令科目「情報資源組織論」のためのテキストである。図書館の情報資源を効率的に整理するための技術と仕組みについて、重要語句の意味を平易に解説することを目的としている。

**東海大学出版部**
〒259-1292
神奈川県平塚市北金目 4-1-1
TEL：0463-58-7811
FAX：0463-58-7833
http://www.press.tokai.ac.jp/